

7月12日のウクライナ情報

安斎育郎

●アメリカのインフレが過去最高(ロシア・テレビ、2022年6月6日)

アメリカの一般家庭の年間支出が昨年比68万円アップ。

https://odysee.com/@Jano:7/inflation_exported:1

●プーチン氏「制裁は壊滅的なエネルギー価格高騰招く」、西側に警告(2022年7月9日)

[モスクワ 8日 ロイター] - ロシアのプーチン大統領は8日、ウクライナでの戦争を巡りロシアに対する制裁を継続すれば、世界中の消費者に壊滅的なエネルギー価格の上昇を招くリスクがあると西側諸国に警告した。

ロシアに科された制裁は経済戦争の宣戦布告と指摘。西側諸国がロシア産エネルギーの依存度を下げよう呼びかけたことが世界の市場を「熱狂」させ、石油価格やガス価格が高騰したと述べた。

その上で「ロシアに対する制裁は制裁を科した国々にはるかに大きな損害を与える」とし、「さらなる制裁は、世界のエネルギー市場に深刻な、誇張でなく壊滅的な結果をもたらすかもしれない」とした。

また「欧州がロシア産エネルギーの代替源を模索していることは認識している。しかし、このような行動の結果、スポット市場でガス価格が上昇し、最終消費者のエネルギー資源のコストが上昇することが予想される」とした。

●ウクライナ大統領顧問アレクシー・ニコラエヴィチ・アレストヴィッチ氏がお怒り(2022年6月21日)

ちょっとばっちい言葉で怒ってます。どうしたかな、この人？

アレストビッチ氏は大統領府顧問として戦況報告を毎日行なっているが、2022年3月14日には、「ロシアが攻撃に使用できる資源は5月初めに枯渇する見込みで、それまでに戦争が終結する可能性が高い」との見方を示していました。1975年生まれ、俳優、ブロガー、政治および軍事コラムニスト。

<https://odysee.com/@Jano:7/arestobich:6>

●ロシア軍 ドネツク州完全掌握へ部隊再編 拠点都市の攻略目指す(NHK、2022年7月9日)

ウクライナへの軍事侵攻を続けるロシア軍は、東部ドネツク州の完全掌握に向け部隊の再編を行い、拠点都市の攻略を目指すものとみられます。

一方、南部ではウクライナ軍の反撃もあるとの分析もあり、一進一退の攻防が続いています。

ウクライナへの侵攻を続けるロシア国防省は8日、南部のミコライウ州やオデーサ州、東部のドネツク州やドニプロペトロウシク州など各地をミサイルで攻撃し、弾薬庫や兵器などを破壊したと発表しました。

またロシア軍は、東部ドネツク州の完全掌握に軍事作戦の重点を移しています。

戦況を分析するイギリス国防省は8日、「ロシア軍の最前線からおよそ8キロ、西にあるドネツク州のシベルシク方向に軍の装備を集中させているようだ。新たな攻撃作戦に乗り出す前に部隊は補充のため一時的に休止している可能性がある」として、本格的な攻勢を前に、部隊の再編を行っている

と指摘しています。

そのうえで、ロシア軍は今後、州内のウクライナ側の重要拠点、スロビャンシクとクラマトルシクの攻略に向け、ロシア側の最前線との間に位置するシベルシクが当面の戦術的な目標になる可能性がある」と分析しています。

一方、イギリス国防省は、「南部ヘルソン州の南西部ではウクライナ軍が徐々に前進している」として、ウクライナ側が反撃する動きがみられると指摘していて、一進一退の攻防が続いています。

プーチン大統領 経済制裁めぐり欧米側を強くけん制

こうした中、ロシアのプーチン大統領は 8 日、クレムリンでエネルギー関係の会合を開き、「ロシアに対し、悪意のある国々が行った電撃的な経済制裁はもちろん失敗した」と述べ、強気の姿勢を示しました。

また、「ヨーロッパ諸国は、ロシア産からの代替エネルギーを求めているが、価格の高騰につながるだろう。さらなる制裁は、世界のエネルギー市場に、より深刻で破滅的な結果をもたらすかもしれない」と述べ、欧米側を強くけん制しました。

●ドンバス解放を前に気持ちを語る女性(2022 年 3 月 12 日投稿)

<https://twitter.com/yasu boy/status/1502405718158155776?t=p6n88ZscvyxJcMLz4EgXWw&s=09>

●ドイツの元首相はプーチンとの友情を断ち切ることを拒否(2022 年 7 月 11 日)

元ドイツ首相のゲアハルト・シュレーダーは、ウクライナでの紛争を終わらせる唯一の方法は外交交渉を通じてであると信じているため、ロシアのウラジーミル・プーチン大統領との接触を断ち切ることを拒否した。



●Odysee のウクライナ関連映像一ちょっと笑いすぎでしょ？

ウクライナが流した事実とかけ離れた情報を人々が信じるあり様を(ちょっとお下品に笑いすぎじゃないと思う程)笑い飛ばす映像ですが、まあ、迷いつつも紹介しておきます。

<https://odysee.com/@Jano:7/WesternMedia:0>

※安斎注:画面の左上に Odysee と表示されていると思います。これは、「一般個人の開発者によって運営されているオープンソースのソフトウェア」ですが、Odysee については、下の「Odysee とは？」の説明映像をご覧ください。

<https://odysee.com/@EBU:e/EBU 2022 What is Odysee:b?r=GfUbtIFGYyikeXKajNSTXigAwrSMHL8u>

●敗北するウクライナ、戦時中の日本と酷似か。西側メディアが報じない“最も信頼できる”戦況分析＝高島康司(Money Voice, 2022 年 6 月 25 日)

※安斎:『ドレイゼン・レポート』という非常に客観的な戦況分析を参考にして、お考え下さい。

◆敗色濃厚なウクライナの戦況

日本の主要メディアでもウクライナの劣勢が伝えられるようになってきたものの、いまだにアメリカを始めとした西側諸国からの大型火器の武器支援でウクライナは反撃に転じ、ロシア軍を撃退するという希望的な観測を述べる専門家が多い。

しかしこうした観測は、ワラにもすがるように、ウクライナ軍に有利なわずかな情報にしがみついているだけのように見える。

東部ドンバス地方を中心とした戦況は、こうした希望的な観測を許さないほど、ウクライナ軍の敗色が濃くなっている。こうした状況は日本ではほとんど報道されることがないので、今回の記事で書くことにした。

ウクライナ戦争の戦況の詳細は、スイス参謀本部の元大佐で NATO 軍の一員としてウクライナをモニターしていたジャック・ボー、また複数の専門家の集まりである「ザ・デュラン」、米国防総省出身と思われる人物の分析を掲載する「ドレイゼン・レポート」、米軍情報将校で元国連核査察官のスコット・リッター、ロシア軍の動きに詳しい軍事アナリスト、アンドレイ・マリヤノフの分析、米軍出身の分析者、ブライアン・バーレティック、そして、世界で 300 万人の読者を持つ大手誌、「アジア・タイムス」が毎日行っている戦況報告である。

これらのソースはほぼ同じ戦況を報告しており、ズレがない。客観的な現実を知るにはもっともよいソースである。

このなかでも、「ドレイゼン・レポート」を発信しているジェイコブ・ドレイゼンは突出している。経歴の詳細は一切発表していないのではっきりとは分からないが、ロシア語に非常に堪能で、ロシア内部の情報に詳しい。「ドレイゼン・レポート」は戦況を詳しく報告するだけでなく、次にどうなるのか予想をして、そのすべてを的中させている。分析者のなかでも突出した存在だ。

「アジア・タイムス」の戦況分析

それでは、「アジア・タイムス」がほぼ毎日掲載している戦況分析と評価を見てみよう。「アジア・タイムス」は、複数の軍やシンクタンクの情報源に基づくウクライナの戦況レポートを掲載している。各方面の戦争プロパガンダや誤報を排除するために、最善を尽くすとしている。

◆6 月 20 日の戦況の評価

東部ドンバス地方でのロシア軍の動きは、緩慢ではあるが、再び活発になっており、ドンバス地方最東端のウクライナ軍への補給を中断するだけでなく、断ち切る決断をしたようである。

今後の重要な課題は、訓練された人材の確保である。消耗戦はウクライナに有利ではない。ウクライナ側は、これまでに最大で 50% の武器と装備を失ったとされているが、NATO 諸国は時間をかけてそれを補うことができると主張している。

しかし、実際に代替できないのは、失われた人的資源である。一方、奇妙なことに、ある米国情報機関の幹部は、「ウクライナ人は武器を与えれば戦い続けられるというのが一般的な論調だ。しかし、ロシア人はウクライナの約 4 倍の人口を抱え、組織的にも人口的にも完全に崩壊寸前であると評価されている」と言っている。

NATO は、「カーニンググロード封鎖を破ろうとするロシアの脅威に対して対処する準備ができていない。しかし、カーニンググロードはロシアの核ミサイル旅団、SS-26 の基地である。3 月には核兵器演習が行われ、2 機の SU-24 が核兵器を積んでバルト海上空を飛行している。

ちなみにカーニンググロードは、リトアニアの飛び地でロシア領である。必要な物資の多くは、ロシア

からリトアニア領を通過する鉄道で輸送されている。6 月 20 日、リトアニアは鉄道の通過に厳しい規制を課した。これがカリニングラード封鎖である。

タス通信によると、5 月に「アゾフ製鉄所」で投降した「アゾフ大隊」のスビャトスラフ・パラマール副司令官と第 336 海兵旅団のセルヒイ・ヴォリンスキー司令官はロシアに移送され、裁判に備えてモスクワの「レフォルトヴォ刑務所」に収監されているとのことである。

そして、捕虜となったアメリカ人傭兵の裁判も行われることになりそうだ。

◆ドレイゼン・レポートの分析

このように、ロシア軍は東部ドンバス地方でゆっくりと確実に支配地域を拡大している。一方ウクライナ軍は兵力の損傷が激しく、たとえ NATO 諸国から兵器の支援があったとしても、十分に戦うだけの兵力がない状況だ。しかし、そうした状況にもかかわらず、米情報機関はむしろこれから崩壊するのは、ウクライナの 4 倍の人口を持つロシアだと言っており、現状を認識できていない。

筆者が情報源としているどのサイトも、この「アジア・タイムス」の戦況分析と同じ内容を報告している。これが現状であろう。ウクライナ軍のちょっとした反撃をウクライナの勝利に近いとして喧伝する日本や欧米の主要メディアとは、大きな違いだ。

しかし、東部ルガンスクの人口 15 万人の都市、セベロドネツクの攻略にロシア軍は明らかに時間がかかっている。これを見ると、ロシア軍がウクライナ軍の攻勢に手を焼いているように見える。ということでは、ウクライナ軍にはまだ十分な反撃能力があり、NATO 諸国から重火器の支援が行われると、戦況全体が逆転する可能性があるようにも見える。実際はどのようなのだろうか？なぜロシア軍は支配地域を拡大しつつも、動きが緩慢なのだろうか？

こうした問いに「ドレイゼン・レポート」は、ロシア軍の動きが緩慢な理由は、ウクライナ軍の効果的な反撃ではなく、ロシア軍の都合だとして次の 2 点を指摘する。

◆ロシア軍の方針①:都市全体の破壊の回避

ロシア軍は、都市全体の破壊を極力回避しようとしている。その理由は、インフラがすべて破壊され、飢えた住民が大勢いる都市を再建するためにはすさまじいコストがかかる。都市の再建コストを勘案し、民間のインフラを維持し、さらに民間人の死傷者を回避しながら攻撃している。

◆ロシア軍の方針②:NATO 軍の侵攻に備えた兵力温存

ロシアは、最高の兵器の多くと利用可能な兵力の大部分を前線から遠ざけている。これは、NATO 軍が直接関与した場合に備える戦略的予備軍である。セベロドネツクのロシア軍は、いま最小の兵力で戦っている。

この「ドレイゼン・レポート」の分析は、筆者が参照している他のサイトでも基本的に同じ見解だ。おそらくこれが、ロシア軍の動きが緩慢な理由なのだろう。ウクライナ軍の反撃に手を焼いているわけではなさそうだ。

◆ウクライナ軍の状況

では一方のウクライナはどのような戦略なのだろうか？「ドレイゼン・レポート」を始めとした信頼できる分析者によると、ウクライナ政府の首脳部は、基本的に次のような戦略を追求しているという。

- 1)戦争を長期化させ、ロシアが経済的・政治的に崩壊するのを待つ。
- 2)長期戦で時間を稼ぎながら、アメリカを中心とする NATO 軍の直接介入を待つ。

もちろん、長期戦を戦う場合、唯一の戦略は静的な防衛、消耗、そして敵が前進できないように釘付けにしてから包囲し、守備を維持することである。

しかし、兵力の損耗が激しいため、たとえこれから NATO 諸国による重火器の支援があっても、戦闘の継続が困難になりつつあるウクライナには、こうした長期戦は困難だと見られている。ということは、この戦略はどう見ても実現不可能だろう。

◆さらに伝えられるウクライナ兵の状態

そうしたなか、前線のウクライナ兵の悲惨な状況がさらに伝えられている。すでに当メルマガの前々回(第 697 回)の記事で伝えた内容と同種のものだ。

先頃「ラジオ・フランス・インターナショナル」は、「セベロドネツク近郊から、ドンバスでの戦闘が激化する中、ウクライナ軍で「衰退が始まっている」と報じた。「兵士たちの間で不満の動きが出てきている。司令部からの物資や支援の不足に不満を募らせている」と指摘し、リシチャンスク近くの兵士たちは、前線で起きていることを「この世の地獄」と表現していると付け加えた。

そして、最近よく報じられるのは、兵士の士気を大きく低下させる主な要因の 1 つとしての、あまりに貧弱な装備である。これは前々回の記事でも紹介したが、状況はさらに悪くなっているようだ。ロシア軍は長距離射程の大砲も装甲車もあり、兵力はウクライナ軍の 5 倍から 6 倍はある。

前線の兵士は、1986 年製の機関銃と旧式の対戦車ロケットしか持っていないという証言もある。1943 年製の「デグチャロフ機関銃」や、1933 年製の「マキシム機関銃」をいまだに使っている。最新式のスウェーデンの携帯用対戦車ミサイルシステム、「NLAW」もあるが、バッテリーが作動しないものが多いという。ウクライナ軍が重火器を強化しなければ、何もできないだろうと考える兵士は多い。

◆ウクライナの逆転は不可能に見える…

このような状況を見ると、兵力の消耗があまりに激しく、士気も低く、重火器の支援も間に合わないウクライナ軍が、この戦争に勝利することは非常に困難だと言える。いま、兵力でも武器でも相対的に余裕のあるロシア軍は、時間をかけながら、自分たちのペースで侵攻を続けているようだ。

もちろん、頑強に抵抗し、ロシア軍の反撃に成功している部隊もある。こうした部隊の攻撃がウクライナ軍の攻勢として、主要メディアでは華々しく喧伝されている。

だが、こうした部分的な成功だけでは、兵力の消耗と重火器の不足に苦しむウクライナ軍の全体的な状況を変化させることはできないだろう。

◆戦前の日本に似てきたウクライナ

このような状況に変化がなければ、最終的にロシアは、東部のルガンスク州とドネツク州、そして南部のザポリージャ州とヘルソン州の 4 州を完全に掌握した段階で、勝利宣言をする可能性がある。

ロシアがさらに南部のオデッサや、その西方にあるモルドバの飛び地、沿ドニエストルまで支配領域を拡大するかどうかはまだ分からない。またこの 4 州をロシアに併合してしまう可能性もある。

すると、ゼレンスキー政権が敗北を認めるのかどうか戦争終結のカギになる。

もし勝利する見込みがまったくないのに戦争を続行すると、いたずらに死傷者数を増大させながら、国土は荒廃する。そのためいまゼレンスキー政権は、ロシアとの和平交渉を模索している。

しかしながら、交渉をウクライナに有利に進め、少しでも占領された領土を奪還するためには、なんらかの戦闘で勝利しなければならない。その勝利を勝ち取るために、戦争が継続しているとも言える。

これは、戦前の旧日本軍が陥った状況とよく似ているように思う。すでに 1945 年の始めには、日

本の敗北は決定的になっていた。日本政府と大本營の内部にも連合国との和平交渉を模索する声はあったが、交渉を有利に進めたいとの思惑から、なんらかの戦闘で決定的な勝利を手にするここにこだわった。この勝利が得られなかった結果、戦争をいたずらに引き伸ばしてしまったのだ。日本は焦土と化してからやっと敗戦した。

いまのウクライナの状況は悲惨である。一刻も早く戦争を終結させるためには、ゼレンスキー政権に戦前の日本と同じ過ちを犯させてはいけないだろう。

いまバイデン政権の内部にも、ウクライナの敗北を認め、和平交渉による早期終結を主張する声が大きくなっている。支持率の低下が止まらないバイデン政権が、中間選挙に向けて、米国民の支持が高いとは言えないウクライナ戦争の終結に向けて、外交的に動き出さないとも限らない。

●ウクライナ南東部のロシア支配地域、中東に穀物売却へ＝通信社(2022年7月5日)

[5日 ロイター] -ウクライナ南東部ザポリージャ地方にロシアが樹立した政権は5日、中東などに穀物を売却することで合意が成立したと表明した。ロシアの国営タス通信が報じた。同地方はロシア軍が一部を制圧している。

ウクライナは、ロシア軍が占領した地域から穀物を盗んでいると批判しているが、ロシア側は否定している。

同政権のトップはイラク、イラン、サウジアラビアに穀物を売却する計画だと発言。イランには15万トンの穀物を供給する契約で、ロシアの商社と国営企業がザポリージャ地方の農家から穀物を買取るという。

買取価格は1トン当たり約200ドルで、生産価格の120ドル前後を上回っているため、悪くない条件だと主張している。

同地方では今週、ロシアからの穀物供給を加速するためトラックによる配送に加え、300両の鉄道車両が導入される予定という。

●アゾフスターリ鉄工所に残されたアゾフの携帯電話(ジョージ・エラソン、2022年6月11日)

<https://t.me/wakeupjapancomeon/4952>

アゾフ連隊などで構成されるウクライナ軍が市民たちを「人間の盾」として立てこもったアゾフスターリ鉄工所では、その後もロシア側による搜索が行われている。そこからは一部が焼けた携帯電話が大量に見つかっているが、アゾフ連隊の戦闘員が女性や子どもたちに拷問を加え、殺害している動画が発見されている。これらは、今後アゾフ隊員の裁判において証拠資料として使われるだろう。

●ウクライナの軍人が蛮行を自供

※安斎注:映像がうまく見られませんが、兵士の会話の内容は以下の通りです。

(軍人A)

彼女に「俺と別の部屋に來い。いいことしようぜ。さもなくば撃ち殺す」と言った。すると、いやだ、どこにも行かないと答えた。それで、安全装置を外して撃った。

—どこを撃った？

頭です。

—どこで殺した？

ここで。玄関のところで。

—その女性の遺体をどこに運んだ？

頭を撃ち抜いた後、遺体をここに運んだ。少し怖かったが、人間がどのように死ぬのか見るのは興味深かった。

(軍人 B)

若い男が2人来て、止まれと命令したが止まらなかった。それからそのうちの1人に「パリアニツィア」とはどういう意味か、3回聞いたが答えなかった。それで撃ち殺した。もう 1 人が「パンだ」と答えた。そいつには何もせず行かせた。

※安斎注：パリアニツィア(palianytsia)という言葉は、ウクライナ語では、ウクライナ語が母国語でなく、音声的にもウクライナ語に馴染みのない人々を識別するための「踏み絵」みたいな役割の言葉として使われています

●ロシア製をウクライナ製として売る詐欺商法(2022 年 7 月 11 日投稿)

<https://twitter.com/morpheus7701/status/1546240614060425216?t=O1baUmzJLW NefKL44-acA&s=09>

※安斎注：ウクライナのおもちゃ屋での短い映像。日本では明らかに詐欺罪に相当するが、ウクライナではこういう商法が日常化しているのだろうか？

ちょっと趣旨は異なるが、公務員と政治家がどの程度腐敗しているかを表す「腐敗認識指数」(Corruption Perceptions Index, CPI)という指標がある。は、トランスパレンシー・インターナショナル(TI)が 1995 年以来毎年公開しているもので、汚職と認識される度合を国際比較し、国別に順位づけしたものである。腐敗認識指数は、最も清潔な状態を意味する 100 から、最も腐敗していることを示す 0 までの範囲で採点されており、7 割の国が 50 未満で、開発途上国では 9 割以上の国が 50 未満となっている。

2021 年度のデータでは、日本は 73 で 18 位、アメリカは 67 で 27 位、ウクライナは 32 で 122 位だった。国家公務員の腐敗が進めば、商取引などにも詐欺的なものが増えるかもしれない。